

サークル棟の放課後は、静まり返っていた。それもそのはずで、今日は祝日で授業はすべて休みだ。何人か学生もいるが、みんな大学の施設を利用したり、自習に来る物好きくらいのものであった。もしくは、自分みたいに忘れ物をしてそれを取りに来る学生。

(なんで忘れちゃったかな……)

ため息を吐きつつ廊下を歩く。

(面倒だけど、明日の授業で使うからなあ……)

サークル部屋の重い扉を閉めると、外を歩く学生たちの話し声は遠ざかり、代わりに古い換気扇の低い回転音だけが室内に響く。中に入って、がらんとした部室を見渡して、「あ」と喉が鳴った。

部屋の隅の長椅子に、サークルの先輩である駿人さんが座っていたからだ。

(駿人さんだ……)

ずっと、遠くから憧れていた人。学年も離れているし、サークルへの出席率は高いけれど、先輩は華やかで、周りにはいつも人がいて個人的に話す機会なんてほとんどなかった。

「……藍太。どうした？今日はサークルないんだが」

低くて短い声が、換気扇の音を切り裂いて届く。駿人さんは頬杖をついたまま、無表情にこちらを見ていた。夕暮れの薄暗い室内でも、その端正な顔立ちは驚くほど鮮明だ。切れ長の瞳に、真っ直ぐな鼻筋。感情の起伏が見えないクールな顔なのに、見つめられると心臓が跳ねる。

(せ、先輩、僕の名前知っててくれたんだ……)

「あ、あの、実は昨日、ノートを忘れてしまって……」

「へえ、そうなんだ。そりゃ災難だったな」

「あ、ええと、あの、まあ……」

「どこに忘れた？」

「あ、あっちのロッカーです！」

慌てて頭を下げて、ロッカーの前に立つ。中を開けて置きっぱなしにしていたノートと教科書を手に取る。ただそれだけなのに、背中に突き刺さる視線が気になって、指先が少し震えた。

「お前さ、いつも、俺のこと見てるよな」

不意に背後から声をかけられ、僕は心臓が口から飛び出しそうになって振り向いた。

「あ、えっ……それは、その……っ」

「……隠すの下手だなあ」

駿人さんはいつの間にか僕のすぐ後ろに立っていた。綺麗な顔が、至近距離で僕を見下ろしている。

そのまま、彼は黙って僕を見つめ続けた。

「……緊張してる？」

「あ、いえ……っ、あの、駿人さん……？」

その拍子に彼の長めの前髪が揺れ、冷ややかに耳のピアスが光った。

「……せっかく来たんだし、こっち来いよ」

「あ、はい……っ」

促されるまま、彼が座っていた長椅子の方へ歩く。座る位置に迷って、かなり距離を空けて腰を下ろした。すると、駿人さんは短く吐息をこぼし、逃げ道を塞ぐように僕との距離を詰めてきた。

「よっと……」

「っ……！」

（ち、近い……！先輩、あんなに離れて座ったのに。どうして……！）

僕は必死に冷静なフリをしながら、膝の上に置いた拳を強く握りしめた。

「……まだ時間あるだろ」

「えっ、あ……はい、少しなら……」

「なら、いいよな」

「え……？」

聞き返した僕に、彼は視線を逸らさず、ゆっくりと大きな手を伸ばしてきた。

戸惑う僕の腰に、彼の指先が触れる。拒絶する隙を与えない、けれど強引ではない静かな動き。気づいた時には、彼の手は僕のシャツの下に滑り込み、普通の男性よりは柔らかな胸をそっと包み込んでいた。

「んっ……！ ひ、駿人さん……っ！？ 何を……」

「……静かに。誰か来るかもしれないぞ」

「し、駿人さん……っ！？ んぁ……！ んう、あぁっ」

(声、出ちゃった……！)

一瞬、パニックになりそうになった。けれど、今日は休日だしほとんどの学生はいない。その事実、少しだけ安心してしまう自分がいた。

(い、いや、ダメじゃん！もしかしたら、僕みたいに来る人がいるかもしれないし！なのに、先輩に、こんな……！)

「あの、やめてください……っ、う、んうっ」

「……嫌か？」

「な、なにしてえ……はあ、んっ……だって、急に、こんなこと、あ……」

「急じゃない。……お前がずっと、俺を誘うような目で見てたんだろ？」

「えっ……！？」

心臓が、耳元で鳴っている。

サークル中も、校舎ですれ違ったときも、僕が密かに先輩を盗み見していた。そこには特別な感情が常

にあった。

(……全部、全部わかってて、見てたんだ……！)

「き、気づいて……たんですか……っ？」

「ああ。全部。……それで、あんなに熱心に見られたら、俺も……我慢しなくていいだろ？♡」

駿人さんは僕が呆然としている間に、シャツの中に深く手を入れた。

僕は全人口の約15～17%にあたる、カントボーイとしての僕の体が、彼の手のひらで熱を帯びていく。男性性を持つが、男性器はなく、女性器を持つカントボーイは普通の男性よりも胸が少しだけある。

その胸の先端を器用に指先で挟み込まれて、きゅっ♡と摘ままれた。ビリリと背筋に甘い電流が走る。

「ひゃんッ！ あ、……っ！ はあ、んっ」

刺激に腰がビクンと跳ねて、僕は情けなくて泣き